

である」)が、G2では文の成分の2番目の位置に移動し、1人称単数形のwillに変化しているのが唯一の違いです。

極端な言い方になりますが、日本語文J1文あるいはJ2文の最後に置かれる動詞(あるいは助動詞)が、正しいドイツ語文G2文の場合には文の成分の二番目に人称変化して移動するというのが、文の構造上の最も重要な相違点です。ただし、度々指摘したように意味内容の伝達度ということだけを考えるならば、G1文とG2文(つまり、日本語的ドイツ語文G1文と正しいドイツ語文G2文)にはわずかな違いしかありません。そして、この違いを埋めるのが文法規則である、と言うことができます。

わたしたちはどんな言語でも(たとえ文法的には多少問題があるとしても)実際に使って、相手に自分の意志を伝達することに限りない喜びを感じます。授業ではこの点を特に心がけて、ドイツ語を楽しく学んでください。



## 日本語の中のフランス語



経営学部  
田川 光照

花子と愛子の会話。

(道で出会って)

—あら、そのパンタロン、すてきね。

—なかなかシックでしょ。昨日買ったばかりなの。

—そろそろお昼ね。その辺のレストランにでも

入らない?

—カフェで軽くすませましょうよ。

(カフェでメニューを見ながら)

—何にしようかな。私は、オムレツとクロワッサン。

—まるで、朝食みたいね。私は、コロッケ定倉、いや、ピラフにしようっと。

(食べながら)

—オムレツにブロッコリーを添えてあるのはいいけど、マヨネーズをかけてあるのには閉口だわ。

マヨネーズ、あまり好きじゃないのよ。

—ピラフについてきたこのコンソメ、なかなかいけるわよ。

上の会話のカタカナの部分は、すべてフランス語から入った外来語です。原語を示すと、順番に、pantalon, chic, restaurant, café, menu (ただし、発音はムニコ), omelette, croissant, croquette (クロケット), pilaf, brocoli (ただし、英語起源の外来語としている国語辞典もあります), mayonnaise, consommé です。

このように、日本語の中にはフランス語起源の外来語がたくさんあります。身近な例をもう一つ挙げますと、日本の度量衡制度はメートル法を採用していますが、これはフランスから来ており、メートル(mètre)、グラム(gramme)、キロ(kilo)、リットル(litre)などの度量衡単位を用いるとき、私たちはフランス語のお世話になっているわけです。

中には、フランス語での意味や用法とは違った用いられ方をしているものもありますが、それはそれで趣があり、日本語の懐の深さでもいったものを感じさせます。たとえば、ズボンの原語はjupon (ジュボン)です。しかし、この単語は女性がスカートの下につけるペチコートを指しますから、日本人男性は皆、女性用下着をはいて闊歩していることになります。ちなみに、フランス語で「ズボン」を意味する単語は上の会話の中にもあるパンタロン(pantalon)です。男女の二人連れをアベックということがあります。この語源のavecは英語のwithにあたる前置詞で、日本語の

「アベック」の意味はありません。また、コンサートなどで、アンコールと叫んで再演奏を求めたりしますが、フランス語のencoreは「再び」とか「もう一度」といった意味の副詞で、日本語の「アンコール」のような用いられ方はしません。フランスで再演奏を求めるときにはBis, bis!と叫びます。

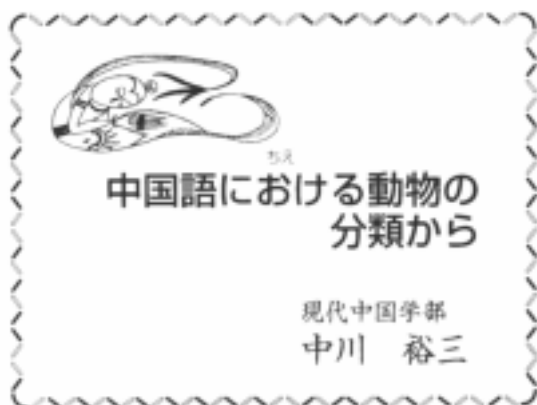
以上、ごく簡単にフランス語起源の外来語を紹介しましたが、さまざまな分野の日本語の中にそれとなくフランス語の単語が忍び込んでいます。国語辞典や外来語辞典で、どのような単語がフランス語から入っているかを調べてみると、意外な発見をすることがあるかもしれません。

<クイズ> 次の外来語の中にフランス語起源のものはいくつあるでしょうか。



- (1) アンケート
- (2) ビス (=ねじ)
- (3) ピーマン
- (4) シルエット
- (5) シュー・クリーム
- (6) マンション
- (7) クレヨン
- (8) デッサン
- (9) テラス
- (10) コンクール

(解答は20ページ)



日本語では、たとえば本を数えるとき、「本1冊」のように、書籍類専用の助数詞「冊」を用いますが、中国語では、「一本書」のように量詞「本」を用います。この助数詞あるいは量詞とい

うものは、事物を数えるときに文法的に必要な要素なのですが、世の中の森羅万象を様々なカテゴリーに分類する役目を果していることから、類別詞とも呼ばれます。

さて、動物のカテゴリーは一般に、日本語では類別詞「羽」「匹」「頭」、中国語では“隻”“匹”“頭”を用いて表します。日本語は中国語と同様に「匹」「頭」という漢字を用いるのですが、面白いのは、日本語と中国語では動物の分類の仕方が部分的に一致しない点です。日本語ではニワトリやネコは「ニワトリ1羽」「ネコ1匹」のように「羽」「匹」という異なったカテゴリーに分類されるのに対し、中国語では“一隻鶏”“一隻猫”のように同じ“隻”のカテゴリーに分類されます。またウシやウマは、日本語では「ウシ1頭」「ウマ1頭」のように同じ「頭」のカテゴリーに分類されるのに対し、中国語では“一頭牛”“一匹马”のように“頭”“匹”という異なったカテゴリーに分類されます。

同じ漢字を用いながら、どうしてこのような不一致が起こるのでしょうか。この問題を解くカギは、日本語と中国語の背景である社会や文化の相違にあります。実際、中国のように広大な国土と悠久の歴史を有する国においては、一国の中でさえ、分類の仕方が地域的、歴史的に異なっているのです。

まず地域的に見てみると、動物のカテゴリーは、中国の北方では前述の“隻”“匹”“頭”で分類され、“隻”が鳥類と小動物、“匹”がウマ、“頭”が大動物のカテゴリーを表します。ところが南方のある地域では、あらゆる生物を“隻”と“尾”の二つの類別詞で区別し、“隻”が足のある生物（主として獣類），“尾”が足のない生物（主として魚類）を表します。中国には古くから南船北馬という成語があります。この成語が本来意味するところは、中国南方は湿潤多雨で河川や水路が発達していることから移動手段は主として船に頼り、北方は乾燥していて陸続きであることから馬に頼っていたということです。中国北方でウマ専用で“匹”という類別詞が用意されているのは、北方においてウマがきわ